
きみに、逢いたくなかった時には。

おおにし 悠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみに、逢いたくなかった時には。

【Nコード】

N9399H

【作者名】

おおにし 悠

【あらすじ】

会いたい人を想う時、あなたはどんなことをしますか？恋人、家族、親友、恩師、かつての想い人…相手を想う時の切なさやほほえましい瞬間をいろいろな立場の視点で綴ります。短編集です。

1) 空、遠く。

大好きな人が関西に転勤になって、もうすぐ1年が経つ。

別に付き合っているわけではない。それなのに、自分でも大したものだと思う。

まさかこれだけ離れても「好き」という気持ちがあんなにも薄れないものとは思ひもしなかった。

私は郊外書店のアルバイト。「彼」は私の同僚の友人で、違う店舗での勤務だったがその同僚を通して親しくなった。そのころから仲はよかったように思うが、「恋愛」の二文字は少なくとも私のほうにはなかったように思う。むしろ、そのころはこちらに別の相方がいた。

かつての相方とは、同じ職場だったのだが、私の仕事が変わってからすれ違が増え、お互いに仕事中心の生活に移っていくに連れ最終的には話し合いで終わりにした。嫌いになったわけではなかったが、そういう状況が続けばうまくいくはずもなく、特に喧嘩をするわけでもなく穏やかに幕を閉じた。

でも本当の理由は今でもよくわからなかったりする。

生活時間のずれを何とかする方法もあつたんじゃないかと思う。でもそれを考えたりする時間を作ろうとしていなかったし、多分考え付いても実行に移さなかったんじゃないかと思う。

そのころの二人は本当に仕事が大事で、それを続けるにはお互いの存在が邪魔。までは行かないにしろ、多少のストレスに近いものになっていたのは違いなかった。

2年付き合つて、その間同棲もして、お互い知り尽くしていたのに……いや、知りすぎてたからなのか。

その人を好きだったことは否定しない。もう昔みたいに何かにつけ

て理由が必要な子どもではないから。でも、その人のどこが「好き」だったのかがもう思い出せない。過去の恋愛なんて、そんなもんなんだろうな、と勝手に納得することにした。

そういう別れがあつてから3ヶ月くらいのことだつたと思う。

店舗交流やら会社の研修などで「彼」と一緒に行動する機会が増えた。知り合つてまもなくのころよりは話すようになったし、こちらもフリーになつたことで異性に対する変な遠慮がいらなくなつていたことで、私はいろんな意味でバリアフリーな状態だつた。

そういう状態は「彼」だけでなく周囲の人間全員が知っていたのかもしれない。別の人が誘つてくることもあつたし、下心がなかつたにしても、バリアフリーな女と男が仲良く2人でいたら周りの人は変な空気を感じるに決まつている。むしろ、そういう状況を作り出されてしまい、心中に波風を立てられた私はヤケになつてヘラヘラしていた。

その日は研修の日だつた。研修終わりに、引率の上司が

「打ち上げしよう、せっかくビアガーデンやつてるし！」と誘つてくれたのだつた。

ビールは苦手だつた。でも上司がこうやって上機嫌で誘つてくれることも滅多にない。断る理由はないけれど、少し休んでから移動したいな…と考えながら、周りが移動を始めるのに返事代わりでついでいこうとした時だつた。

「あ、僕、スーツなんで着替えようかなと。車も置いていきたいんで一回家帰ります」

「彼」が皆を見送るようにして言った。

「そうだな。じゃあ先に行つてるから後で合流しようか」

「はい…でも一人だけ抜けて合流つてのもちよつと寂しいからどうしようかなと」

「彼」は少しもじもじしながらそう言った。

「じゃあ私、付いていくよ。」と、気づいたら私も言っていた。「彼」は、うん、と頷いた。そうして、その日私は「彼」の車に乗って家に初めて行き、シャワーを浴びて着替えるのをソファでうとうとしながら待ち、地下鉄に乗ってビアガーデン会場へ他愛もない話をしながら向かった。

「彼」の寂しいからどうしよう、という言葉は、別に私に向けてそれを言ったわけではなかったかもしれない。こちらを向いていたかどうかは私のいた位置からはわからなかったし、それを本人に聞いて確かめることも出来るだろうけど、きっと「彼」は憶えていないだろう。

けれど、その申し出は私にとってはこの上ない助け舟であったことは言うまでもない。そしてその時の「彼」のもじもじした顔は、今まで私が出会った男性の中で一番魅力的な顔だった。

その時に私が恋に落ちたかどうかはわからない。簡単に恋に落ちれるほど恋愛経験が少ないわけではなかったし、そもそも一緒にいる時間が増えたから「好き」と思うには直前の経験から無理があった。ただ、「彼」を自分にとって「特別な存在」と認識するには充分すぎるきつかけだった、とは思う。

それからまた3カ月後、突然転勤が決まって「彼」が関西に経つ日に、私はそれまで心で暖め続けてきた気持ちを電話で伝えた。空港の喧騒をバックグラウンドに「彼」は、ありがとう、と照れくさそうに言ってくれた。数十分後、「彼」を乗せた飛行機が青空に飛び立った。

電話を切った後、その青空を私は川沿いの堤防からずっと見上げていた。

空が青く見えるのは大気が光を吸収したり反射したりしているからだ、という科学的な根拠が説明されてはいるが、そのことを必ずし

も全ての人が知っていなければならぬというわけではない。
それと同じように、私が「彼」を「好き」になつた根拠がどこかにあつたとしても、それがわかるうがわかるまいが、私の気持ちは変わらない。「こういうところが好き」という後付された理由の逆が起こつたとしても、それが「彼」を「好き」でなくなる理由にはならないからだ。かつての相方と私が、そうであつたように。

空は気まぐれに表情を変える。穏やかな青空の時もあれば、不安を誘う曇天の時や雷雨になることだつてある。それでも私と「彼」は等しく同じ空の下にいる。遠く離れていても、同じ空を見上げるこゝとが出来ているなら、その距離は私の気持ちにさほどの問題は与えないだろう。

次に「彼」に逢う時、空を見上げたらもう一度気持ちを伝えてみようと思う。

空よりも近い距離で、彼の照れくさそうな表情を本当は見たいのだ。それまでは同じ空を見上げて、「彼」を想おう。

1 (空、遠く) (後書き)

続き物ではなく、短編集として定期的に執筆していく予定です。何篇まで続くか未定ですが、お付き合いいただけると幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9399h/>

きみに、逢いたくなつた時には。

2010年10月9日07時13分発行